

第 324 回研究報告会 (7 月 18 日)

The 16th United Nations Day of Vesak (UNDV) 2019 参加報告

堀内みどり

6 月 12 日から 14 日にかけて、ハノイ (ベトナム) で開催された第 16 回 UNDV の様子を報告した。1999 年 12 月第 54 回国連総会で、「ウェーサク (Vesak) の日の国際的認知」宣言が行われ、2004 年からは仏教の盛んな国が国家的な催しとして本格的に祝っている。宣言には、「毎年 5 月の満月の日が仏教徒にとって最も聖なる日であり、仏教徒はこの日に仏陀の誕生、悟り、入滅を祝うものであることを認識し、……世界最古の宗教の一つである仏教が、過去 2000 年以上にわたって人間精神に果たしてきた貢献、そして今なお果たし続けている貢献に対する承認が与えられる」としている。Vaisākha 月 (5 月～6 月) の満月の日を中心に行われる UNDV は、ベトナムでは第 5 回 (2008 年)、第 11 回 (2014 年) と過去 2 回開催され、今回で 3 回目の開催となった。

会場となったベトナム仏教協会 (広大な池と山々に囲まれた一帯・ハノイから車で約 1.5 時間) 本堂や食堂などでは、ブツダ誕生直後の水浴を模し、ブツダ像に水を注ぐことができるようになっていた。期間中は多くの一般信者や世界中から UNDV に参加した人で会場は満杯となり、堀内が発表した研究部門だけでなく、絵画の展示や平和のための読経と灯りの奉納、花火、伝統文化や歌のショーなど、多彩なプログラムが 3 日間わたって繰り広げられた。

開会式・閉会式では、関係各国からのお祝いのメッセージが代表者によって語られ、なかでもアフリカ仏教協会の代表は、アフリカにおける仏教の役割を情熱的に訴えた。また、開会式での国連事務総長のメッセージでは、「不寛容と不平等が増大している時代において、非暴力と他者への奉仕という仏陀のメッセージは、これまで以上に適切なものであります。」と述べられた。報告では、こうした会期中の様子を写真と共に紹介した。

「国際比較神学会議 2019 (International Conference of Comparative Theology 2019)」に参加して

澤井真

2019 年 7 月 23、24 日に、オーストラリア・カトリック大学で開催された国際比較神学会議 2019 に招かれて、基調講演をおこなった。この国際会議は、宗教学者のフランシス・X・クルーニー教授 (ハーバード大学) を中心として、比較神学に関心をもつ宗教研究者によって構成され、北米はもとより、パキスタン、インドネシア、シンガポールなど世界各地から、ユダヤ教徒、キリスト教徒、仏教徒、さらにイスラーム教徒など約 160 人が参加した。

1 日目は、まず、国際会議の実行委員長であるアニータ・C・レイ教授 (オーストラリア・カトリック大学) が国際会議の趣旨説明をおこない、引き続いて、クルーニー教授による開会を兼ねた基調講演で開幕した。比較神学の視点から、カトリックの宗教思想とヴェーダーンタ哲学を比較しながら、自らの信仰

に対する「深い学び」をめぐる講演した。その後、3 つの基調講演とともに、1 つの並行セッション (6 部会の同時開催) での研究発表が行われた。

天理教学に関する基調講演

2 日目には、3 つの基調講演と 3 つの並行セッションが行われた。筆者は 2 番目の基調講演の講師として登壇した。「天理教の教祖を慕って一より深い学びのための諸宗教の役割」(Following the Foundress of Tenrikyo: the Role of Religions for Deeper Learning) と題して講演をおこなった。その講演では、教祖を慕う白熱の信仰のなかで進められた、天理教学にとっての比較研究の意義と諸宗教の役割について考察した。

一般参加者も多数来場していたため、まず、天理教について概説した。前日に参拝の機会を得たメルボルン市内にある天理教の布教拠点、天理教メルボルン心勇教会とジョイアス壘港布教所の写真を交えながら、天理教を紹介した。

中山正善 2 代真柱は、親神・天理王命が教祖の口を通して伝えられた教えを、より深く理解し、誤りなく伝えるために天理教学の意義を強調された。その際に採られた視点の一つは、他宗教との比較研究を通して宗教を明らかにしようという宗教学 (比較宗教学) であった。この意味で、天理教学と宗教学は「二つ一つ」の関係にあり、天理教学は比較神学的視座を内包したものとなっている。いわばクルーニー教授の言う、信仰に対する「より深い学び」(deeper learning) のために、天理教学は位置づけられるとも言えるかもしれない。

ぢばは親神が人間を初めて宿込まれた地点であり、親神天理王命、教祖、ぢばはその理一つである。そういう意味において、ぢばの中心性は天理教において不可欠である。『稿本天理教教祖伝逸話篇』には、数多くの逸話が収録されているように、先人たちはぢばの方角を拝してきた。大正・昭和普請を通して、ぢばの中心性がより明確化されたが、それは中山正善 2 代真柱が諸地域への巡教や諸宗教との比較研究をおこない、教祖の教えへの「より深い理解」に関わっていることを示唆した。最後に、筆者の研究分野である、イスラーム神秘思想における神の名に関する議論を通して、天理教の神名に込められた意味を掘り下げて考察した。

アジアにおける比較神学

会議翌日の 25 日には、「アジアにおける比較神学」と題した国際ワークショップが行われた。シンガポール、インドネシア、インド、オーストラリアなどからの参加者が、それぞれの地域の視点から、アジアにおける比較神学の可能性を論じた。筆者は「震災復興にみる信仰間理解—天理教学の視点から—」(Inter-faith Understanding in the Post-Earthquake Recovery: from the Perspective of Tenrikyo Theology) と題した研究発表をおこなった。その内容は次の通りである。

アジアのなかでも、日本はとりわけ災害が多い。天理教をはじめ、多くの諸宗教の「聖典」では、神への信仰としての「道」が説かれ、そのことで信仰と救済の絶対性が強調される。イスラームにおいても、shari'ah, tariqah, shir'at, sabil などの「道」に関連する語がある。しかしながら、震災復興の現場では、そうした信仰者や非信仰者という区別なく、いわば道はすべての